

Rio

リオ
豊田市矢作川研究所 月報

CONTENTS

- 矢作川観察ノート(14)
- 西広瀬小学校
総合学習中間発表会
- 今月の一枚
- 平戸橋周辺の自然観察(5)
- 今月の一枚
- 研究所の調査風景

2001 September
No.41

豊田市矢作川研究所

〒471-0025

愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F TEL 0565-34-6860 FAX 0565-34-6028

homepage <http://www.hm.aitai.ne.jp/yahagi/index.html> e-mail yahagi@hm.aitai.ne.jp

*Rioはホームページ上でもご覧になれます

矢作川観察ノート(14)

大型ダム上流の山河崩壊

新見幾男

昨年9月11・12日の東海豪雨で、矢作川水系の森林、河川、流域市町村に大きな被害があった。まだ全貌が明らかになっていないが、この災害の濁流を受け容れた三河湾の海にも、三河湾と矢作川を往来するアユやサツキマス等の回遊魚にも被害があったことだろう。

この東海豪雨から17年前の1983(昭和58)年9月28日夜にも、矢作川源流部に10号台風くずれの局地的集中豪雨があり、矢作川と三河湾の生物生息環境は大打撃を受けた。今回の東海豪雨による山河崩壊が矢作川の3大支流(上村川、根羽川、名倉川)の全域で起きたのに対し、17年前の山河崩壊は上村川水系の一部に局地的に発生したものだ。

そういう規模の違いはあったが、2つの災害の様子は良く似ていた。いま思うに、天は17年前に山河大崩壊型の局地災害を起こす予行演習をしていたのに、私達はその災害の教訓を忘れて17年間を無為に過ごし、今日の山河崩壊に直面したのではないか……。

実は前回の矢作川源流の局地的な山河崩壊は、日刊新聞の東濃版に大きく報道されたことをあとで知った

のだが、西三河版にはまったく載らなかった。豪雨から10日ほど日数が経過しているのに、矢作川の濁流は続いていた。原因さえわからなかった。当時の「月刊矢作川」誌の編集部が濁流の“みなもと”を探す調査をはじめたのは、10月7日になってからだった。

矢作川河口から80km(豊田市街地から40km)上流にある矢作ダム(総貯水量8,000万t)は、赤茶色の濁



上村川(澄ヶ瀬付近)復旧工事の様子 2001.7.27 内田朝子 撮影

流と流木でいっぱいだった。濁流をたどって更に20kmも進むと、上村川水系 飯田洞川の白井沢という大V字溪谷の沢という沢が山頂付近から抜け落ちていた。その崩壊土が随所で深いV字溪谷をせき止めてダムをつくり、それが瞬時に次々決壊して土石流となり、飯田洞川、上村川を襲い、矢作ダム湖に流入した

のだろう。そう想像させる災害の爪痕が残っていた。

この17年前の山河崩壊は、前述の上村川水系 飯田洞川の白井沢のほかに、同水系木の実川の雉子洞と坊主洞でも起きた。いずれも木曾川水系と矢作川水系を分ける三森山(海拔1,100m)に共通の水源をもっているのだが、そこに400mmもの集中豪雨が降り、局地的な山河崩壊が発生し、矢作川と三河湾に長期汚濁を



もたらした。崩壊現場の被害総額（復旧費）は32億円と言われたが、長期汚濁による河川と海の被害額は誰も算定しなかった。

当時の上矢作町長の平出勇氏は「災害復旧に当っては下流域に迷惑をかけないように万全を期します」と言い、今後の恒久的な災害防止対策については、こう語った。「危険地帯での自然林の伐採・人工植林は止めるように森林組合と協議する。特に川の兩岸各6mには、絶対に植林しないようにしたい。上矢作町の人工植林率は既に76%に達しているが、このあたりが限界という認識をもっている」。

それから17年経過し、矢作川源流のほぼ全域で山河崩壊型の大災害が発生したのだが、この間に「災害に強い森づくり」は前進したのだろうか。人工林の管理放棄が一層進んだだけで、危険地域（河川、沢の兩岸）の自然林化さえまったく計画されなかった。矢作川源流の森の事情は悪化の一途をたどって来たと思う。

今回の山河大崩壊をふまえ、国土交通省中部地方整備局が「矢作川の環境を考える懇談会」を継続的に開いている。愛知、岐阜、長野の矢作川流域関係者で河川の環境問題を考えようという主旨の会だ。その第2回目の懇談会が8月10日に上矢作町で開かれ、災害の現地視察のあと、人工林の間伐推進や危険地域の自然林化などを議論した。いずれ同懇談会は、矢作川源流の森の強化を具体的に提起すると思われる。

このチャンスを民間側も逃がしてはならない。農業用水団体、工業用水団体、海と川の漁業団体が一致協力して、まずは山河崩壊現場の復旧に際して、危険地域一帯の自然林化を推進してほしいと思う。さらに大規模な山河崩壊が迫っているように思われるからだ。

別の話である。17年前の山河崩壊でも、崩壊現場から発生した石、小石、砂利は矢作ダム湖に沈んでしまい、ダム湖からはウドン粉のように粒子の細かいマナゴ（真砂）ばかりが流れてきた。1971年の矢作ダム完成以来、そういう傾向が続いてきたが、今回の災害で矢作川と三河湾の生物生息環境は決定的に悪化しただろう。子どもが遊ぶ砂浜も中流域から消えた。河床材料、海底材料のバランスが崩れたと思う。矢作ダムの砂利採取現場から出る小石や砂利を下流へ搬送してほしい。

（にいみ いくお、矢作川漁業協同組合 専務理事・豊田市矢作川研究所 事務局長）

7月2日に豊田市立西広瀬小学校体育館で行われた「総合学習中間発表会」に行ってきた。1年生、2年生はカエルやクローバー、オйкаワやドジョウなどを通して知った自然の楽しさを頑張って発表。3年生、4年生は用水門の仕組み、および水質測定結果など、調べて分かったことを興味深く発表。5年生は、それぞれのプロジェクト（生き物・花・木・河川浄化）につ



1年生発表の様子

西広瀬
小学校

総合学習中間発表会

小川
都

いてその意義と未来像を、楽しく伝えようと工夫して発表。6年生はテーマ（自然・たい肥・ダム・チョウ・森・メダカ・ゴミ・植物マップ）に沿って詳しい調査を行い、下の学年の子にやさしく伝えることを心がけて発表していました。

上級生になるほど内容が深くなり、それをわかりやすく、おもしろく工夫して発表する西広瀬小の皆さんを見てみると、学んだことを確かに自分のものにしていく印象を受けました。また、この日の発表から、「よしおさん」「たかのりさん」「ともくんのおじいちゃん」など、身近な大人の名前が親しみをこめて呼ばれていることに気付きました。学校と地域と、そして自然の中での総合学習のこれからが楽しみです。

（おがわ みやこ、豊田市矢作川研究所 研究員）

今月の一枚



ヒトホシクラカケカワゲラの幼虫

(稲田和久氏 撮影)

矢作川中流域、古巣あたりでは普通にみられる。羽化期は6月～9月。

平戸橋周辺の自然観察(5)

山原勇雄

8月1日(水)は昼前に平成記念橋下流右岸をスタートして、越戸公園脇までの川岸の植物を調べました。

まず荒井公園を横切って河原に下り、州を見ました。州と川岸の間はかなり大きな淵ができており、その周囲にはオオイヌタデが密生して、目立たない薄桃色の花穂をたらし水面を見つめているようでした。

水面に目を移すと、小魚がたくさんいるのかと思いきや、よく見たらウシガエルのオタマジャクシが無数に泳いでいてびっくり！ 体長15cmほどだろうかというオタマジャクシで水面が黒く見えるほどで、猛暑のなかの生き物の生の営みを見せつけられるようでした。

河川敷では緑の雑草たちが生き生きと輝いていました。花をつけているものは少なかったけれど、それでもミソハギやイヌタデ、ボントクタデの花が微



アレチマツヨイグサ (筆者 撮影)

笑みかけていました。

あまりの暑さに平成記念橋の下で小休止した後、車で越戸公園の南に移動しました。このあたりは昨年9月の東海豪雨の時に大量の川砂が堆積した場所で、目立った立木がほとんど姿を消し、雑草に覆われている中にエノキの大木がぼつんと残っていました。ツルヨシが走出枝(ランナー)を出して堆積した砂地を這い回っていました。その側では夜咲く花、アレチマツヨイグサが群生しており、昨夜咲いた花が人目を引いていました。日当たりのいいところではメドハギ、コマツナギ、オナモミが目立ち、エノキの大木の下ではママコノシリヌグイが赤みがかかった粒状の花をつけていました。ムシトリナデシコの妖精のような花も咲いていました。また、ヤブガラシやネナシカズラの生命力を目の当たりにして、暑さに耐えて生きる様子に感動させられました。

(やまはら いさお、平戸橋自然観察『草だらけの会』)

オオイヌタデとウシガエルのオタマジャクシ (筆者 撮影)

研究所の 調査風景

8月4日(土)

研究所主催の水生物親子観察会を越戸公園横の矢作川で行いました。親子15組ほどの参加があり、ヤゴ(トンボの幼虫)や魚のギギに人気が集まりました。身近な川の生き物になじみを持つきっかけづくりに役立つようです。(内田)



参加者の感想文より

親

●参加させて頂きありがとうございました。家族だけでは川へ遊びに行っても、おみを振り回すだけ

で何も取れないので、今日来てよかったですと思いました。

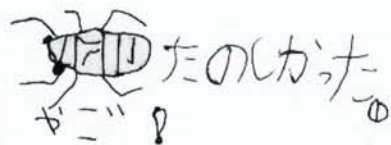
●矢作川にいろいろな種類の生き物がいるのに感動しました。簡単につかむことができ楽しかったです。こんな素晴らしい親子観察会に参加できてうれしかったです。ぜひ次回もあれば参加したいです。ありがとうございました。

●ザリガニやおたまじゃくしを川へ取りに行くのが大好きな子どもです。今日もギギの子どもやコママトンボのヤゴ、アメンボ、アブラハヤを取ってとても満足そうです。身近な川にどんな魚がいるのか子どもなりにわかったようです。またこのような企画があればぜひ参加したいです。

子

●きょうはさかなをつかまえにいきました。2ひきつかまえたけど、2ひきとにもげられちゃった。けどたのしかったです！

●矢作川の中に入ってつかまえたたくさんの種類のいきものが、掬んでいるなんて思ってもいませんでした。この会に参加して楽しかったです。



●きょうはさかなをとつたのしかったです。まえまえからたのしみにしていました。いろいろかんさつができてよかったです。大きなさかなのギギがほしかったです。きょうはほんとうにありがとうございました。

8月7日(火)

『カワ二十とその寄生虫について』のゼミを行いました。自然共生研究センターで特別研究員をされている浦部美佐子さんに来所いただき、カワ二十の生態と一般に知られていないカワ二十の寄生虫のユニークな生態についてのお話をいただきました。当研究所員をはじめ児ノ口公園でゲンジボタル幼虫の里親をされている方々も熱心に質問されていました。(内田)



おしらせ

全国川づくりコンテスト、第4回「川の日」ワークショップが7月14日と15日、東京・明治神宮内などで開催され、矢作川チーム(代表 裕さくらさん)がグランプリに輝きました。68チーム(韓国5チームを含む)が出場し、約400名の出場者がありました。矢作川チームは今年5月に古岸水辺公園で開催された「矢作川「川会議」」の実行委員を務めた官民合同の8名です。賞名は『豊かな川文化の継承・再創造への地域の知恵の結集で賞』でした。

編集後記

猛暑も過ぎ去り、夜更けの虫の声に秋の気配がします。矢作川中流域でのアユの友釣りは解禁直後によく釣れたきりでその後の朗報は少ない模様です。矢作川のアユは9月が一番美味しいと言われています。今年はいかななものか気になるところです。(内)

ご意見・ご感想をお寄せください